

読書

『加害者と被害者の“トラウマ”

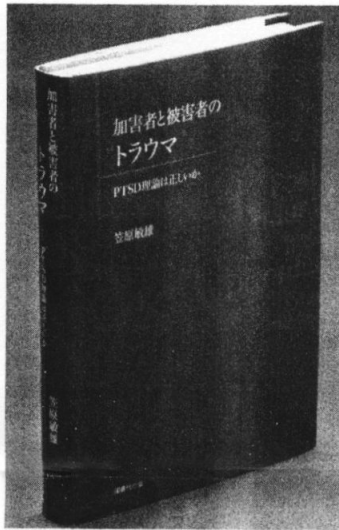
P T S D理論は正しいか』 笠原 敏雄著



野田正彰

が読む

Noda Masaaki



国書刊行会・3,000円

◇かさはら・としお 1947年生まれ、早稲田大卒。96年、東京都品川区に「心の研究室」開設。著書に「隠されたカ―唯物論という幻想」など。

概念の欠陥 精緻な論理で検討

外傷後ストレス障害（PTSD）なる障害概念を理解している人が、果たしているのだろうか。こんな精神障害があるのだろうか。確かにPTSDとしてくり込まれた中の個々の症状、侵入性回想（フラッシュバック）、悪夢、驚愕反応などは見られるが、診断基準のすべてを満たす人は多くない。私はベトナム戦争で虐殺にかかわった韓国兵、日本軍の性暴力被害者、日本へ拉致された中国人勞工、ドイツの

絶滅収容所を生き抜いた人、いくつかの内戦の生存者、あるいは大事故の遺族、内外の大災害の被害者などの診察や精神鑑定にかかわってきた。いわゆる「精神的外傷」体験にさらされた多くの人がとてつきた精神科医の私でも、自然災害や事故などの一過性の体験の後、PTSDになった人に会うことは稀である。

またベトナム戦争復員兵の多くがPTSDになったとはいえず、圧倒的多数はそうならない。例えば、ソニミ村の村民虐殺を行った将兵がPTSDになったとは聞かない。今なお、ほとんどのアメリカの復員兵や精神科医は、自国のPTSD者をはるかに超えるベトナム人が外傷体験に苦しんでいることを想像もしない。

アメリカ社会はベトナム侵略戦争で国民的外傷体験を持ち、その微かな葛藤と反省を少数者がPTSDとして表現したといえるだろう。それでは、日本はどうか。精神的外傷にほとんど関心を持ってこなかった日本社会は、阪神大震災によって「心の傷」、「心の

てつくりあげられた。この時、人為災害や自然災害の被害者にも共通点があると考えた。だがそれまで「ベトナム戦争後症候群」と呼ばれてきた症状の人びとは、虐殺を行った加害者であった。災害や事故の被害者が侵入性回想などの症状を表すからといって、加害者と同じ精神障害とするのはあまりに無理がある。

それから十数年の騒ぎを経て、著者の笠原敏雄さんはPTSD概念の成立の歴史、その欠陥を精緻な論理と入念な文献研究によって検討している。性暴力については被害者にもみられる戦争についてのは被害者へのみ見られるとされているのは一貫性を欠く、という指摘は説得的である。PTSD概念の矛盾を一つずつ批判した後、著者は、加害者に起る症状は、良心の呵責を覚えながら、自らの罪状に真正面から向き合つことができず、真の反省を避けようとするために起こったものではないかと述べる。他方、症状が先に現れ、過去に遡って「トラウマ」なるものが探り出された事例では、その症状は過去に原因があるのではなく、症状が出現する直前にあった別の原因によって起こっているとして別る。いわゆる遅延型なるものへの批判である。

◇のだ・まさあき 1944年高知県生まれ。評論家、精神病理学者。

本書は専門書に分類されるものであるが、東日本大震災の岩手、宮城、福島県などが十億円をかけて「心のケア」センターを急造し、学校が「心のケア」調査なるものに振り回されているとき、私たちは空虚な概念を輪にして踊っているのではないかと、反省しみるための優れた著作になっていく。本書を読み終えた時、PTSDや「心の傷」概念がいかに社会的・政治的背景を持っているか、深く考えさせられる。